

故郷の聲 上

菊池敬一



著者紹介

菊池敬一（きくちけいいち）一九二〇年岩手県に生まれる。岩手師範学校を卒業し教員となる。著書に「あの人は帰ってこなかった」「かっぱの目は星の色」「北天の星よ輝け」など。丸木俊氏との共同の仕事に「おしらさま」「きつねのおきてがみ」「八郎太郎」などがある。

現住所／岩手県和賀郡和賀町横川目一五

丸木 俊（まるぎとし）一九二二年北海道に生まれる。女子美術専門学校卒業。一九五〇年以來、丸木位里氏と共に「原爆の国」を発表。一九五二年国際平和文化賞を受賞。著書に「ひろしまのピカ」「幽霊」「女絵かきの誕生」などがある。

現住所／埼玉県東松山市下唐子一四〇一

NDC 913

Printed in Japan

故郷の声（上）

一九八一年一月二五日 第一刷発行

著者 菊池敬一

発行者 小峰広恵

発行所 株式会社小峰書店

東京都新宿区舟町六

電話／代〇三三三三三三

振替／東京六一九五四四

組版／国際文化交易株式会社／本文印刷／株式会社厚德社／表紙印刷／斎藤印刷所 製本／小高製本工業株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえします
定価はカバーに表示してあります

菊池敬一

故郷の声 〔上〕



小峰書店

故郷の声へ上
もくじ

吹雪ふぶきの夜……………9

お日さまポトンの国……………16

ウルシの皮の笛……………24

貞任山と麻畑さだとうやま あさばたけ……………33

キッコのもんぺ……………46

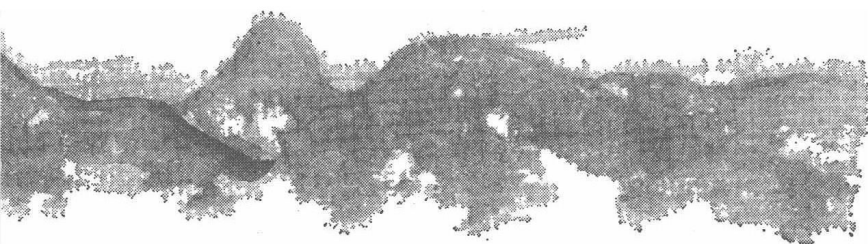
黒い足音……………63

ゲンコツ学級……………79

青春……………92

希望……………105

代用教員……………114

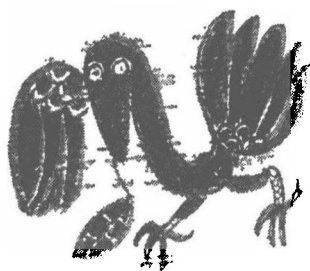


知倉莊三……………	130
召集令状……………	149
わかれの祝い……………	161
別の世界……………	173
逃亡兵……………	189
戦車の群れ……………	205
殺人……………	220
捕虜拷問……………	234
夜襲戦……………	252
敗残……………	269

装幀・さし絵／丸木俊



故郷の声へ



吹雪ふぶきの夜

小林健太郎こばやしけんたろうが岩手県いわてけんの、山裾やますそにある農家に生まれたのは、村じゅうが吹雪ふぶきでござうと鳴る夜だった。大正九年（一九二〇）一月のことである。

このとき、おとうの明助めいすけは、ケツトを頭からかぶって、縄なわでダルマみたいにゆわえて、おしげ産姿さんばをたのみに出た。

まず、百メートルほど離れた隣りの、善作ぜんさくの家に寄った。起きてきた善作のおつかあはあわててもんべをはきながらはりきっていった。

「まんつ、こったな吹雪ふぶきの晩ばんげに。去年生まれたおらあ家のキッコのときも、ちょうどこったなふぶく晩ばんげだったども」

「もうしわけねえ。あらしの夜中で」

「なに、心配ばいらねえ。産婆さんがくるまでえ、おれいつてしつかど、見てでや

りますから」

明助はケットをかぶりなおして、

「ほんとにありがてえ。ほほー、ずいぶん吹いてくださるごと」

と、いいながら外へ出た。その後へ善作のおつかあは大声でいった。

「なに、あらしの晩げに生まれるわらしあ、氣い強^{つえ}えてくて丈夫^{じやうぶ}に育つっていわれるもんで」

星明りの中を吹雪が音をたてて走っていた。

「そうか。こったな吹雪の晩げに生まれるわらしは、吹雪に負けねえくれえ強えぐ育つか」

おとうは、吹雪の中でころぶたびに、なんともそうつぶやいた。はじめて生まれる子どもなので、おとうは嬉^{うれ}しくてうれしくてならない。だから、蟹^{かに}沢^{さわ}の土橋をふみはずして沢の中にころげ落ちて、ちょうちんを飛ばしたときでさえ、

「ホホホー、おもしろいふぶくもんだごと」

と、暗い中でひとりで笑い声をたてたほどだ。

おしげ産婆の家は、四キロメートルも離れた駅前だった。明助が産婆の家についたときは真夜中の一時を過ぎていた。

おしげ産婆は六十をこしていた。だから、この夜中の吹雪の中をとでも歩けるものではなかった。でも、年ににあわず大声で話す元氣者だった。

「あいや、やっと生まれるか。めでてえ、めでてえ」

おしげ産婆は、待っていたかのように、身支度みじたくをした。

明助はおしげ産婆を背負って吹雪の中をこいだ。おしげ産婆は、背中からちようちんをかざしながらいった。

「こったな荒れる日に生まれるわらしあ、一生苦勞が多いというもんだ」

明助はそれには返事をしなかった。

「苦勞なんぞあなんでもねえ。丈夫じょうぶでさえあれば、苦勞なんぞあなんでもねえ」

おとうはこぶしで汗をふきふき、心の中でつぶやく。顔に吹きつける吹雪もかえって気持ちよかったし、ごうごうとなる山の音も勇ましく聞こえた。

明助が、おしげ産婆を背負ってやっと帰ったとき、善作のおっかあが大声で、

「もう生まれたでばよ。男わらしだでばよ」

と、奥から叫んだ。

明助は、かけあがった。味噌玉^{みそだま}みたい^{みそだま}に赤黒くて、両手の中に入ってしまったような小さい子だった。

「育でばいいども。こったな小さえわらし、見たことねえも」

おしげ産婆は心配そうにいった。

明助は、いろりに、どんどん火をたいて、湯をわかしながら大声でいった。

「なに、強え^{つよ}あらしの晩げに生まれたがら、きつと強えわらしに育つべ」

おつかあのヨネは、赤子の頭をさすりながらいった。

「なに、これ、髪^{かみ}の毛もまっ黒くてかたいわらしだから、きつと、きかない男わらしだべも。これ、小さくても、こったに乳^{ちち}を飲^のむ力あ強えがら、きつと強えわらしだべも」

赤ん坊は子犬みたいに、乳房^{ちぶさ}にかみついてくる。ヨネは体のそこから嬉しさがこみあげてくる。このわらしを、どんなことがあっても育ててみせると、ヨネはいままで

感じたことのない強い気持ちでそう決める。

明助は、名前を健太郎とつけた。



雪にとじこめられていた村にも、やっと春が近づいてきた。あおく光る空を、白鳥が高くたかく輪をかいて飛ぶ日は、雪はざらめ雪になってまぶしく光る。

そんな日、ヨネは健太郎をふところに入れて、うらないをしてくれる村はずれのイタコのところへ出かけた。袋に米三升入れて背負っていた。

「このわらし、こったに小さいわらしだどもだいじょうぶ育ちまするか」

おっかあは、うらない代金の代わりの米袋をおし出しながら、おそるおそるイタコに聞いた。

イタコは、目の見えないばさまだった。大きな数珠を、がらがら鳴らして、なにかもがもが唱えながら、健太郎の頭や顔をなでまわした。健太郎は小さい体で手や脚をふんばると、蛙みたいに大きな口をあけて大きな泣き声をたてた。ヨネは、歯をくい

しばって健太郎を見つめながらおさえている。

イタコはへんな節まわしで歌でもうたうようにいい出した。

「このわらしは、だいじょうぶそだつから、しんべえすることはねーども、はたちぜんごになったころ、しぬかいきるかのくろうをするども、それさえのりきれば、あとはもうだいじょうぶだから、しんべえはいらねーども、ただひとつっかりまもらねーばならねーことは、ときじせつには、かならずかみさまをおがみもうして、このわらしのことをたのみもうすことだ。それさえかならずかたくまもれば、あとはなんにもしんべえーはいらねー」

ヨネは、体を石みたいにかたくして、ひとことも聞きもらさないようにそれを聞いた。イタコの唱えごとが終わったとき、あんまり嬉しくて、出てくる涙をふきもせず、板間にひたいをおしあててお礼をいった。

そのときから、ヨネに一つの口ぐせができた。健太郎に乳をやるときは、かならず頭の黒い髪の毛をなでながら、

「おまえは死なねえわらしだよ」

と、いった。

でも、健太郎は、やせて小さくて汗を流して泣く子だった。ヨネはそんなとき、健太郎が泣きやむまで歌をうたった。

やまのからすが もつてきた

あかいはっぱの てがみっこ

ひらいてみたれば けんたろは

つえーわらしと かいていた

なかないわらしと かいていた